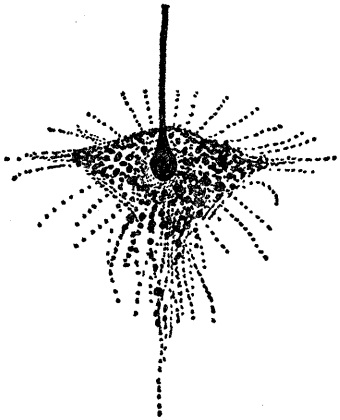

堀田吉雄

感激の一とき

私にとって終生忘れることの出来ない日というのは、そんなに数多くあるわけではなさそうである。その大切な一日が、昭和二十六年九月二十一日であった。ちょうど三十年前のことであった。

私は、その頃はまだ勤めていたのであったが、所用があって上京した。半日暇を得たので、成城の柳田邸を訪れた。当時は、民俗学研究所があった頃であった。

この研究所は、柳田国男の書斎を利用し開設されていたのであった。刺を通じて来意をつげると、大間知篤三が応対に出てきた。柳田先生に会いたいと申し入れると、大間知は、先生は地方から来る人を歓迎されるけれども、何分、ご高齢だから、時間は十五分か二十分程度にとどめるよう注意された。

今私は八十二才だから、五十二才の時であった。私は明治三十二年亥年の生れだが、柳田先生も亥年のお生れ

であった。明治八年のご生誕だから、年表を見るとやはり亥年だ。

猪は、向う見ずに、まっしぐらに突っ走るというが、私も確かにその傾向はあるような気がする。つまり、柳田国男と堀田吉雄とは比較するのも愚かな話だが、亥年ということだけは、紛れもなくぴたり一致する。

二十四才の年齢差は、親子の差と見てよいだろう。兄弟のちがいではない。一つ世代が異るわけだ。先生は、まさに七十六才であられた。翌年喜寿のお祝いがあった。

こうして、私は、柳田の応接室で、初めて向いあった。正確にいうと、九月二十一日の午さがり、二時頃であったと思う。少し大袈裟にいえば、本居宣長の松阪の一夜という感じであった。ただ、私は鈴屋大人のような将来性のある人物ではなかっただけである。

話は、伊勢湾口の神島から始まり、先生が桑名の船宿・船津屋に二度も泊ったというようなこと、私が伊勢民俗学会を創立したいという希望などを話した。桑名は私の住所だ。

時間はどんどん経過して、私は気が気でなかった。腕時計の方に度々眼をやるものだから、先生は、これからどこかへまわるのかと尋ねられた。

私は、恐縮して大間知の注意のことをいった。先生は「そんなことといったかね、かまわないよ、ゆっくりしたまえ」という次第で、十五分が二時間にもなった。

私は、申しわけなくて、重い腰をあげた時先生は「この本をあげるよ」といって、無造作に、一冊の枡型本をいただいたのであった。その本が『母の手毬歌』であった。

奥付を見ると、版元・芝書店・昭和二十四年十二月一日初版となっていた。二年前の本を、べつだんどういうお考えもなく、恵与されたものかと、感じた。

誰の紹介状を持参したわけでもない、風来坊の私に、しかも初対面の私にだ、近著を恵まれたことは、並々でないことと私は感激したのであった。

『母の手毬歌』の末尾見返しに、私は次のように書きしるした。「柳田国男先生よりたまわる　昭和二十六年九月二十一日――堀田吉雄」―思えば、柳田も大間知も共に鬼籍に入って久しく、今は逢うよすがもない。

『母の手毬歌』

実は、「母の手毬歌」という一文は、も少し早く『村と学童』（昭和二十年九月三十日発行・朝日新聞社）の巻頭に収められていたのであった。終戦直後のいわゆる焼跡闇市時代のご本で、あのどさくさの時に、よくもまあ出版が出来たものと思う。

今から見ると、仮綴のざっとした装釘で用紙もザラ紙であるが、挿画も入っており、記念すべき一本であった。私は、この本を東京の古本屋で求めたのであった。

私が柳田先生から頂いた『母の手毬歌』は従って再度のご用ということであった。それだけに、柳田国男の愛着が感じられるという感じである。

本書も前著も、疎開学童が本などの乏しい田舎に住んで、わびしい思いをしているのを気の毒に思い、何か少年少女向きの話をと心をこめて物されたのであった。

ここでは、「母の手毬歌」だけを問題にしてみたいと思う。柳田はまず、手毬というものについて、詳しくその歴史をしるしているのである。

マリといえば、今の子供は、ゴムマリの外は知らないであろう。木綿の白い糸をくるくる巻いて、直径七～八センチぐらいの球体にする。柳田は、糸をつむぐ際のくず糸・端し糸などを集めてつくったものと述べている。

柳田の母刀自は八人の男の子を育て、近隣のもめ事にまで口を出していたしっかり者であったと書いている。それだけに、兄嫁はしんぼうであったともいっている。

その母刀自が、くず糸をもらいためて、美しい色糸で、模様を飾ったと述懐している。柳田自身も、見よう見まねで、マリツキもしたらしい。もちろん少年時代のことだ。

とんとんと地上でつく遊び方と、上にほり揚げてもてあそぶ遊び方があった。そうして手まりには、必ず手まり歌がうたわれた。主として女の子の遊びであった。

とんとん叩くは誰さんじゃ……

あるいは又、

つくづくぼうしはなぜ泣くね！

というような文句で始まる手毬歌のあったことを、先

ず柳田は挙げている。前の歌は、私も子供の頃、耳にしたことがあった。私の記憶はうろ覚えで、まことにおぼつかないが、ちょっと思い出してみよう。

とんとん叩くは誰さんじゃ
せったがかわって替えにきた
お前の雪駄は何鼻緒
赤いと白いの交ぜばなご
そんな雪駄はなかったが
文福茶釜に茶がわいた
これで一こんかしました

一こんかしたとは、一貫貸したという訛りでもあろうか。一問一答型とでも名づけられる手まり唄であった。この種の歌は、そうとう種類が多い模様である。

また、柳田は「あれ見やれ向う見やれ」というような歌があって、よそ見をわざとさせようとするものがあったと述べている。よそ見をさせて、マリを落させようとはかったのだとあった。これは「つく」よりも「あげる」方の手毬ではなかったかと思われる。

しょんがい婆さん

しょんがえという唄は、江戸末に一世を風靡したといわれ、沖縄までも及んでいるのであるが、それにちなんだ「しょんがい婆さん」という手毬歌が、これまた日本の北から南まで、大流行をしたのであった。

お茶もいやいや煙草もいやいや
しょんがいなァしょんがいな
しょんがい婆さん
ことし九十九で　くゥまァのへ
嫁入りしょとおゥしゃる……

お茶もいやいやの前があるのだが、歌い方や文句は、自由勝手にこじつけるのが又一興であった。各地各様につくり変えたらしい。

今年九十九で　熊野の
薬屋へよめりしょとおしゃる
嫁にいくとて奥歯がぬけて
前歯二本におはぐろつけて
しらが三本にたけながかけて
前を通れば子供らが笑う
うらを通れば若衆が笑う……

まだまだ長くつづく歌であった。ユーモラスな歌で、

最初はクの字づくしというわけであった。オハグロも、タケナガも、今では子供らに、どのように説明したらよいか、まことに厄介千万である。

これらの手毬歌の作者は何人であろうか。お寺の和尚さんとか、手習いの師匠とかいうような町や村の物知りの手すさびであろうか、追跡すれば面白いであろう。

キャッチボール時代になって、糸かがりの手まりなど、民俗資料館へでも行かなければ見ることも出来ないであろう。しかし、こうした昔のマリに郷愁を感じ、一所懸命に蒐集している特志家も、世間にはいるのである。

『母の手毬歌』というタイトルからして、私どもは昔なつかしい思いがするのだが、塾通いに浮き身をやつす哀れな現代の少年少女はどう感じるであろうか。

柳田は、前掲の二著は、小学五、六年生、特に女児のために執筆したといっているが、試験地獄の世の中だから、まり揚きなどという余裕は、今の子供にないのかもしれない。

（伊勢民俗学会主宰）

第11回みどり会夏季合宿研修会

テーマ　“保育の充実をめざして”

○日　時　昭和56年8月18日(火)，19日(水)，20日(木)の2泊3日間

○場　所　静岡県熱海市上宿 1—29　岡本ホテル

○費　用　参加費　1名 6,000円　宿泊費　2泊5食付　1名 14,000円　計20,000円

○申　込・期　間　6月15日の消印より受付　定員になり次第〆切らせていただきます。

・払込先　口座振込　協和銀行荻荷谷支店　普通 No. 5077762（現金の送金は受付ません）

・はがきに下記の事項をかき，1人1枚でお申込みください。

①氏名　②男女別　③現住所　④勤務園名　⑤勤務園住所 TEL

⑥夏季休暇中連絡先住所及 TEL

○申込先　東京都文京区大塚 2—1—1　お茶の水女子大学附属幼稚園気付　みどり会研究部宛

○定　員　400名

○内　容　各自の研修を充実するために研修スタイルを新らしく計画いたしました。

講　演		お茶の水女子大学教授 同大学附属幼稚園長	外山滋比古 氏
		お茶の水女子大学教授 同大学家政学部長	津守　真 氏
シンポジューム	“保育の充実をめざして” —自由討議によせて—	お茶の水女子大学教授	太田次郎 氏
		〃　助教授	本田和子 氏
		筑波大学助教授	若松美黄 氏

・詳細は申込先におたずね下さいませ